

中学校「技術・家庭」家庭分野における 甚平製作を通して考える衣生活文化の題材開発

村上かおり 鈴木 明子 一色 玲子 藤井 志保
林原 慎

1. はじめに

平成20年1月の中央教育審議会による学習指導要領等の改善に関する答申では、教育内容に関する主な改善事項として、伝統や文化に関する教育の充実が挙げられている¹⁾。それを受けて、中学校新学習指導要領技術・家庭、家庭分野では、浴衣など和服について調べたり着用したりするなどして、和服と洋服の構成や着方の違いに気付かせたり、衣生活文化に関心をもたせたりするなど、和服の基本的な着装を扱うことが有効な手だてとなり得ることが述べられている²⁾。

我々のこれまでの研究^{3)・4)}においては、日常の着装行動に対する評価活動を取り入れた結果、生徒が個々の衣生活を多面的にとらえ、衣服や着装に対する関心が高まることが明らかとなった。また、デザイン、色彩、素材を、TPOに応じて衣服選択する中で、生活知と学校知が結びついているという成果も得られた。またパーソナルカラー探しならびにカジュアルベスト製作を通して、個性を生かす着装の工夫についての授業を実践してきた。これらを通して、着装について考え、それを規定する複合的な要因について学習を深める方法として、自己と他者による評価活動が有効であることが示唆された。

本研究では、これまで行ってきた衣生活題材における製作教材を和服に代えて、衣生活文化に着目した題材を提案する。ここでは、和服の中でも中学生にとって馴染みがあり日常着として着用することが可能な甚平を取り上げた。これらの学習の中で、改めて生徒が自分の衣生活をみつめ、身近な衣服や技術が、我が国の伝統や文化の中で受け継がれてきたものであること、自分たちもそのような文化の創造の担い手であることに気付くことを期待している。そして、それらの気づきを通して、衣服や着装について既にもっている認識を、社会と自分との関わりの中でとらえ直すことができれば、日々の着装行動や衣服選択にかかわるよ

りよい意思決定を促すのではないかと考えた。

近年の家庭分野の時間数の減少と現行指導要領において被服製作が必修ではなくなったことから、現在、和服の製作を扱っている事例は少ない。新学習指導要領（平成24年実施）では、改めて製作が必修となったが、必ずしも着衣できるものを製作する必要はない。また、3年間の指導計画の中で製作に多くの時間数を割くことは難しいのが現状である。

甚平は、和服ではあるが、上衣は平面構成、下衣は立体構成の衣服としての学習が可能である。また、上衣は、筒袖でおくみがなく、和服としては比較的縫製に手間と時間を要しない。このように中学生にとっては適度な難易度であり、完成による達成感が得られる教材ではあるものの、かなりの時間を要することは必至であり、先述した家庭科の実情から、指導計画に位置づけるには困難が予想される。しかしながら、製作することを通して、素材や構成や技能と直接向き合い主体的に学習に取り組むことは意義あることと考え実践を試みた。製作活動を通してこのような問題解決的な学習を展開することは、一人ひとりの生徒の衣生活の背景にある文化を具体的に問い直す機会になると考えられる。また、製作を通して、和服と洋服の違いや近年の衣生活の変化を理解し、衣生活を豊かにするための工夫ができるよう働きかける。さらにこれまで行ってきたパーソナルカラー探しによる着装行動の自己・他者評価活動も継続的に行うことも効果的に位置付けることができる。

本報では、中学3年生を対象として、甚平製作を含む一年間の衣生活題材の実践を試みる中で、生徒の和服やその構造に対する認識の実態と変容を探り、授業の効果を検証し、今後の指導計画改善への示唆を得ることを目的とする。

2. 題材の学習指導計画

本題材は、広島大学附属三原中学校にて平成22年度中学3年生（9学年）2クラス（83名）を対象として、藤井志保教諭によって行われた。以下に題材の学習指導計画を記す。

科学技術の急激な進歩と経済の発展は私たちの衣生活においても物質的な豊かさをもたらした。デザイン・素材・色などさまざまな衣服が流通し、衣服は作るものでなく、安価に購入する時代になった。子どもたちも、古くなり着られなくなったら、廃棄し買い直すという大量消費型の生活の中にいるからこそ、何が本当に豊かな衣生活なのかを見直していく必要がある。一枚の布から衣服を製作するという経験は、製作技術を身につけるだけでなく、衣服の構成を理解し、着用の工夫、手入れ、収納、再利用やあまり布の利用など、ものを大切にするという視点で衣生活を見つめ直す絶好の機会となる。そこで本研究における学習指導計画では、甚平を製作することで、和服の良さにも触れながら、製作の楽しさを感じ、それを着用する喜びを仲間と共有しあうことを目指すこととした。また、パーソナルカラー（似合う色）についての学習や個性を生かした着用についての学びを取り入れることで、衣生活への関心を高め、より豊かな衣生活を工夫しようという生活実践力を育みたいと考えた（表1）。

本校では、実践的な活動を充実させるため20名での少人数授業を行っている。小学校では、エプロンなどの平面的な作品をミシンで製作し、また手縫いの基礎基本は習得済みである。しかし、中学校では被服分野の作品、それも一枚の布から衣服をつくるのは初めてである。そのため、ミシンの練習、布の扱い方などの学びの意欲は高く熱心であるが、技術面においては個人差が大きい。今までの家庭科の授業で幼児・高齢者との体験学習を行い、人とのかかわりを重視した活動を行っていることもあり、お互いアドバイスをしあったりして問題解決する場面が多く見られ、苦手な生徒も、製作の喜びを感じている。また、夏休みに、TPOに応じたお気に入りの衣服について絵で表現する課題にチャレンジさせたところ、工夫を凝らして取り組んでいた。

指導にあたっては、甚平の製作を通じて、幅広く衣生活に関心を持ち、学んだことを生かすことができるように、次の4つの事項を指導の柱として活動の中に取り入れた。①甚平をなぜ作るか、どのように作るか、どう活用するかの道筋を示し、課題を解決しながら学ばせる。②和服についての調べ学習を行い交流する。③個性に応じた着用の工夫についての学び（パーソナルカラーを探そう）を取り入れ、衣生活への関心を高

める。④仲間同士で課題を共有し、かかわりあいながら作業を進める。

③の個性に応じた着用の工夫については、夏の課題「お気に入りの衣服」の絵をお互い見合うという活動の中から「色」に注目させた。そして、カラー布を用いて自分に似合う色を探す活動を通じて、個性に応じた着用の工夫という新たな視点を生徒に持たせることを試みた。カラー布を通じて、相互評価しながらコミュニケーションをとることが、子ども同士の人間関係作りにも役立ち、衣服製作の場面で生かされると考えた。

表1 題材の流れ 年間指導計画

学年	内容		時間
8	8年生の家庭科のまとめ	8年生の家庭科で学んだことのふりかえり くらしをみつめて 9年生の家庭科に向けて	1 家庭科
	製作の準備 布の裁断と縫いしろの始末	甚平を作ろう 和服とは 甚平の布選び	1 特別活動
9年生の家庭科で何を学ぶか		1	
甚平の製作と目的		1	
裁縫ミシンの使い方を学ぼう		1	
布に裁ち印をつける 布を裁断する		2	
夏休みの課題	縫いしろの始末をする(ジグザグミシン)	2	
	甚平の調べ学習 和服についての意識調査		
9	上衣を縫う	ポケットを作ってつける	2
		背縫いをする	1
		裾とえり下を縫う	1
		えりをつける	3
		そでをつける	1
		わきとそで下を縫う ひもをつける	1
着用の工夫	夏のお気に入りの服 パーソナルカラーを探そう	1	
	パンツを縫う	パンツの構成を学ぼう	1
ウエストとすそを折る		1	
また下を縫う		1	
すそを縫う		1	
また上を縫う		1	
ウエストを縫う ゴムを通す		1	
甚平のファッションショー	甚平のファッションショーの企画を立てよう	2	
	甚平のファッションショー	2	
まとめ	今までの家庭科の学びの振り返り くらしをみつめて これからの生き方を考える	1 家庭科	

※甚平の布は、製作にかけられる時間を考え布へ裁断線がプリント済みのものを使った。

目標

- 仲間とかかわりあいながら意欲的に製作に取り組み、衣生活への興味関心を高める。
- 自分の衣生活をふり返り、目的や個性に応じた着用の工夫をする力を育む。
- 衣服製作の基礎的・基本的技術を身につけ、衣生活に生かす力を育てる。
- 和服と洋服の違いを理解し衣服の構成や衣文化に関心を持ち、衣生活に生かす力を育てる。

3. 夏休みの課題にみる生徒の意識

(1) 生徒の和服製作に対する意識

夏休みに甚平の歴史や和服の着用経験を調べる課題

を実施し、その中に和服製作に関する意識を問う質問項目を設けた。結果を以下に示す（回答74名）。

1) 甚平の製作希望

前年度に甚平とカジュアルベストのどちらを作りたいか、製作物の希望調査をおこなった。その時に選択した製作物と理由について、今年度振り返って回答させたところ、全体の55.4%の生徒が甚平の製作を希望していた（図1）。また、甚平を選んだ理由として「日本の伝統的な物に興味があったから」という意識や、「和服の作られていく過程を見たことがないから」、「どういう仕組みでできているかを知りたかったから」といった被服構成に関する興味、「甚平をもっていないから」、「カジュアルベストよりも着る機会があると思ったから」等の着用目的があげられていた。

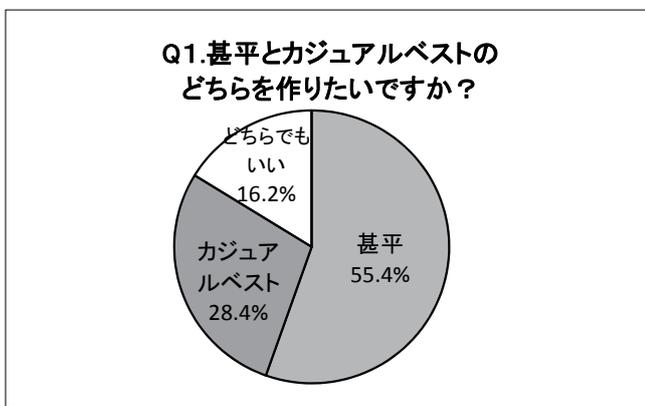


図1 製作物の希望調査

2) 製作意欲の変化

今年度4月に教師が甚平を試着して見せた授業での製作意欲と、製作が始まった9月の製作意欲およびその理由を調べた（図2）。その結果、製作前89.1%、製作中87.9%と、全体の9割近くの生徒が「楽しみ／楽しい」と感じていた。

製作前に楽しみだと感じた理由に、「(実物を見て)結構本格的だと思ったし、どんな風に作ったのか知りたかったから」、「完成したときに自分の布があんな感じになったらすごいなーと思った」、「実物を見て、さらに作る意欲がわいてきて、自分がこれから作るものも完成度を高められるように頑張ろうと思った」、「作ったのを着てみたのを想像したらとても楽しそうだった」といった実物を見たことによってみえてきた目標や製作意欲等について記述していた。

製作中に楽しいと感じた理由は、「大きな一枚の布がだんだんと甚平になっていくので、細かくて地道な作業もやる気がでて楽しいから」、「毎時間少しずつで

も完成に近づいていく様子を見ると、完成が待ち遠しくなり、とても楽しみになるから」等があり、被服構成の製作過程に関わる楽しさを感じていた。また、「一部ずつできていく達成感がいい」とあるように、達成感という言葉が多くみられたことも特徴であった。

製作前と製作中とで意識が変化した事例を取り上げる。製作前は「あまり楽しみだと思わなかった」生徒は、その理由を「自分はミシンが苦手という意識が強く、甚平はミシンでぬうところも多そうに見えて、先のことがとても不安だったから」と記述していたが、製作中は「とても楽しい」という意識に変化しており、その理由として「やはり最初はかなりミシンで手まどって、友だちの助けをかりながらやっていて、理解していくととても楽しい、ミシンとも仲良くなれた気がするから」と記述していた。このように製作意欲と製作技術への自信が関連して変化していた。

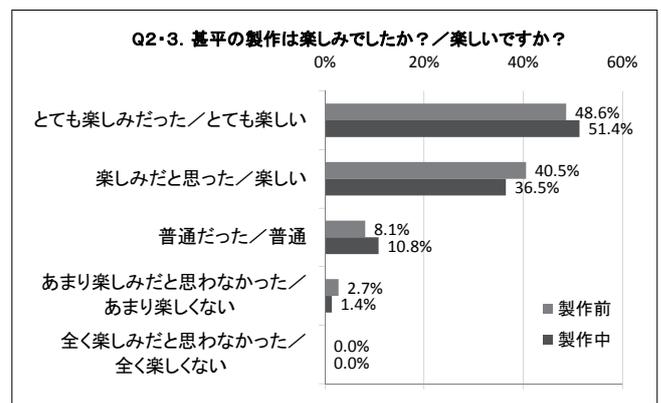


図2 甚平の製作前と製作中の意識

3) ミシンの使用に対する意識

全体の81.1%の生徒がミシンの使用について「とても楽しい・楽しい」と感じ、5.5%の生徒が「あまり楽しくない・全く楽しくない」と感じていた（図3）。

「楽しい」という理由には、「最初は使いこなせてなかったのに、今は使いやすく感じるようになったから」、「色んなスピードがあるけど、慣れてくると、とてもハイスピードでぬえるようになったりして、成長を実感できたから」、「慣れれば幅1mmを意識できるし、だんだん上達するのが自分でもわかるから」、「最近4月や小学校のころよりはうまく使えている気がするから。ミシンがリズムを持って、針を動かしているのがおもしろい」等があり、技術の上達を実感している生徒が多くみられた。また、「失敗するのは怖いけど緊張の中での集中がおもしろい」、「すごい難しいけど先生にほめられるとがんばれるし、自分でもちょ

表2 和服を着た経験

時・場合	回答数	種類
やっさ祭り・夏祭り・盆踊り・七夕	78	浴衣・甚平・はっぴ
七五三・十三参り	39	着物
正月	4	着物
運動会	29	はっぴ
旅館・ホテル	13	浴衣

っとうまいと思っているから」と難しさを肯定的にとらえる意識や、「ミシンといっても色々な縫いかたがあるので場所によって縫い合わせるなどの楽しさがあるから」という被服製作の興味にかかわる記述もみられた。

「あまり楽しくない」と回答した生徒は、「ミシンに糸を通すのを失敗してしまうと、これでまた遅れるとあせってしまい、余計に難しく感じてしまう。縫う作業は楽しいけれど、準備がちょっとまだ大変だから」、「ミシンが苦手でうまく使いこなせなくて、アクシデントも多々あるし、なかなか真っ直ぐな線で縫えないから」と記述した。「全く楽しくない」と回答した生徒は「(布端の始末の)ジグザグミシンでかなり苦戦したから」と記述した。これらからミシンの失敗経験や技術不足から生じる否定的な意識がみられた。

また、「普通」と回答した生徒の中に「手縫いよりは速くぬえるけど、失敗したときほどくのが大変だから」といった製作過程における手縫いとミシン縫いの違いを記述した回答がみられた。

やっさ祭り・夏祭りなど夏の行事の時に、浴衣・甚平・はっぴを着た場合が78回と最も多く、ついで七五三・十三参りといった成長に伴った行事が39回であった。正月に着物を着たという回答も4人みられた。これらの結果より、多くの生徒が学校行事の中だけでなく家庭行事においても、和服の着装経験があることがわかった。

着装したときの感想について、日常生活で着ている洋服と比較して回答してもらった。祭りでは着装した甚平・はっぴに対しては、軽い、涼しい、動きやすい、楽であるといった回答が多くみられ、袖口が広い、からだを締め付けなく、ゆったりしているという被服構成の視点から、洋服との違いについて考えた回答もあった。また日本人なんだなあという特別な気持ちになった、日本人らしさを感じたという回答もみられた。日本人として誇りを感じるという回答もあり、和服が日本の文化であると感じている視点がうかがえた。

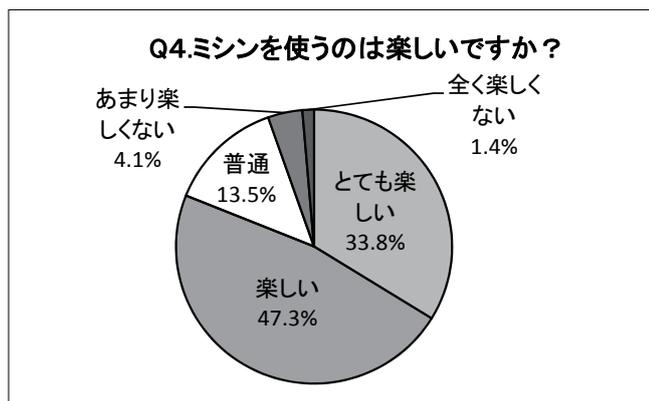


図3 ミシン使用に対する意識

以上から、生徒の和服製作に対する意識として、和服の構成を知りたい、着用したいという製作意欲があるだけでなく、9割が甚平製作を楽しみ、あるいは楽しいと感じていたことがわかった。さらに、理由の記述にみられたように、製作する過程に楽しみや達成感を抱いている生徒が多いことがわかった。

2) 和服着装者を見た経験とその感想

日常生活で和服を着ている人たちを見た経験についても調査した。その結果、成人式、結婚式、弓道や剣道のときという回答が複数名にみられた。また歌舞伎役者、神楽演者、演歌歌手、落語家といった芸能活動の場面でも、和服の着装者を認識していることがわかった。

これらの着装に対しても、自分自身が和服を着装した時と同様、日本人としての心を感じる、日本らしいという回答があげられていた。そのほかには、鮮やか、華やか、コントラストがいいなど、色や柄、模様に対する印象が書かれていた。また厳か、りりしい、かっこいい、清いといったイメージがあげられていた。

(2) 和服に対する意識

1) 和服着装経験とその感想

甚平の製作にあたり、これまでの衣生活における着物などの和服を着た経験について調査した。調査内容は、いつ、どんなときに着装したか、またそのときにどんなことを感じたかである。

着た経験を思い出して、できるだけ多く回答してもらったため、回答数はのべ回数となっている。(表2)

4. 製作過程における生徒の実態と変容

製作過程において、生徒たちはいろいろな気付きを示し、変容する姿を見せた。本稿では、上衣の製作過程を中心に示す。

この題材では、授業時間数の少ない中、和服の特徴をつかみながらどのように製作の指導をしていくかが、最大の課題であった。

その中で留意したのは下記の6点である。これらを

生徒たちに把握させるために、授業のはじめの数分間で各時のキーワードを黒板に板書した。

キーワードを示したことにより、多くの必要な情報から特に意識してほしい点を、生徒に理解させやすいと考えた。また本来は製作過程の流れを理解した上で作業を進めることが望ましいが、時間的な制約があるため、作業しながら深く理解させていくようにした。このように生徒はキーワードをもとに、なぜか、という製作工程の一つ一つの意味を熟考し、製作する。その結果、和服の特徴を理解しながら、丁寧な作業によりきれいな甚平が仕上がると考えた。これらの意図からキーワードを提示しながら授業を進めた。

- 1) 和服の特徴について考えられる部分については、洋服との違いにも触れ、比較しながら考えさせた。作業の中で、和服の特徴や文化にも触れさせていくようにした。
- 2) 難易度が低い基礎的な部分については、手順書（教材に付属している）を活用して一斉説明を行い、効率的に作業させるようにした。
- 3) 難易度が高く、示範が必要な部分については、なぜそう縫うのかという作業の意味を考えさせながら取り組ませた。
- 4) 一斉説明の時間は言葉少なく、短時間で必要最低限のことしか伝えないようにした。必要に応じて、個別指導に重点を置いた。その時、説明内容をクラス全体へ聞こえるように発信しながら行った。（その説明は自分にも必要だと考えたら聞きに来てよいし、途中で自分の作業に戻ってもよいというルールで行った。）
- 5) 作業の途中でも、布を体にあてて縫った部分の役割（ポケット、背縫い、えりなど）を実感させたり、完成見本を手にとらせて、目標を確認させ、全体のどの部分に取り組んでいるかの見通しを持たせた。（資料1）
- 6) 作業の速い生徒には、アドバイザーとしてまだ遅れている生徒にかかわらせるようにして、クラス全体として、生徒同士で問題解決しながら取り組ませるようにした。（資料2）

キーワードの例

- ・ 試し縫いで何を試す
- ・ しつけをかける位置
- ・ 待ち針 手前から向こう 線に対して垂直
- ・ 手アイロンていねいに
- ・ ポケット口四角のミシン
- ・ 中表って
- ・ えりぐり切り込み慎重
- ・ えりつけどまりの点

・ えり先美しく など

手アイロンとは、本物のアイロンを使わずに、指先（爪）で丁寧に折ることをいう。この言葉で伝えながら作業を進めた。製作に用いた布は、綿で折り目もつきやすく、三つ折りをする部分など、手アイロンによってたいのアイロンの機能を果たすことができるので、時間、スペース、電力が節約できるだけでなく、安全に作業できる。そのため、教室にはアイロンを設置せず作業を行った。



資料1 背縫いをして布を体に合わせている生徒たち



資料2 アドバイザーがアドバイスをしている様子

甚平の製作の中で一番難しい作業であるえりつけの工程では、生徒たちに「なぜ？」そうするのか考える視点を4つ示した。平面構成の和服の中で、立体的な人間の体の形に合わせてえりは立体的に付けること、そして本来、和服は手縫いで行われてきたことも伝えた。授業では、基本的にミシン作業により進めることにしていたが、えりつけのような立体的な部分は手縫いで行ってもよいこととした。結局、学年83人中4人

が手縫いにより、えりを仕上げた。

えりつけの手順、えり先の始末の方法を説明すると、縫い方の意味に先人の知恵を感じたと思われ、ほとんどの生徒が驚きの表情を示した。えりの部分が甚平製作の出来栄に最も影響があると考えたようで、何度も失敗してほつきながらがんばる生徒や、納得するまで自分から縫い方を質問する生徒もいた。その結果、全体としては作業進度に差がつき、その遅れを取り戻すために冬休みに補充学習を行うことになった。

えりをつける時に考えてほしい「なぜ？」

- ・えりつけどまりよりえりを15cmは縫わないのはなぜか。
- ・身ごろのえりぐりのカーブの縫いしろに切り込みを入れるのはなぜか。
- ・えりつけどまりはどここの点をいうのか。
- ・えり先の始末をする時、えりつけどまりから横へ短い距離でも正確に縫う必要があるのはなぜか。

毎時授業後に記入させている振り返りカードによると、えりつけの時間の記述では、「和服は折りたたむと長方形のようになる」と平面構成を実感した内容もみられた。

また「えりの切込みを入れた部分は待ち針をたくさん打ってしつけも細かくして、ミシンはゆっくり縫った。」「やっとえりの原型が見えてきました。この方法を考えた人はすごいなあとおつくづく思います。細かいところや難しいところを突破したので、次はより丁寧にきれいに仕上げたいです。」といった作業に対する姿勢の変化とみられる内容が記述されていた。

5. 今後の課題

本研究で行った甚平製作の授業は3年生が対象であった。3年生の年間の家庭科の授業時数は17.5時間であり、甚平を製作し、さらに和服の構成や和服の文化、着装の工夫までを学ぶには時間はかなり不足している。そのため、表1にも示したように家庭科だけでなく、特別活動や総合の時間にもこの衣生活の内容を組み入れて取り組むこととした。

また甚平製作の工程はカジュアルベストよりも複雑で、これらの工程を一段階ずつ進めていくためには、製作意欲を高め、維持する必要がある。

図1に示したように、2年生の最後の授業では約55%の生徒たちが甚平製作を希望した。このことを考えると、難しい題材に意欲的に取り組む姿勢が、製作に入る前から多くの生徒にみられていたと推察でき

る。また教師が自分の衣服を作ることを通じて、衣生活について深めて考えていこうと語りかけたり、何を作りたか意見を聞いたり、自分たちの考えを採り入れて題材を決めようとしていることをとても好意的にとらえていた。このことも意欲の向上に寄与したと考えられる。加えて、4月の初めの学級活動の時間に、担任の先生と共に教師が縫った甚平や教材見本の布を生徒たちに提示し、クラス全体で布選びを行った。実物を見て、試着することでさらに製作工程を認識しやすくなったと思われる。

このような製作に入るまでのさまざま過程が、多くの工程を要する甚平製作に対する継続的な意欲の啓発につながったと考えられる。

以上、本研究では甚平製作を含む一年間の衣生活題材の実践を試み、授業の効果を検証した。

その結果、製作過程を通じて、生徒は日頃着ている洋服と比較し、和服の特徴について多くの気づきを示した。またそれらの気づきが衣生活文化に対する造詣を深めたいという意識に変化している様子もうかがえた。このことから甚平製作を通して得られることは多く、甚平製作が衣生活文化の題材として有意義であることが示唆された。しかし、授業時間の制約という大きな課題も改めて認識できたことから、今後は家庭科の授業だけでなく、特別活動、総合などの時間とどのように連携し、伝統や文化に関する教育の充実に取り組むべきか、その方法をさらに検討する必要があると考えられる。

参考・引用文献

- 1) 文部科学省：『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）平成20年1月17日』
- 2) 文部科学省：『中学校学習指導要領解説技術・家庭編』教育図書，2008.9
- 3) 鈴木明子，村上かおり，木下瑞穂，藤井志保，箕島 隆，一色玲子：「中学校「技術・家庭」家庭分野における着装学習の指導方法に関する研究—「パーソナルカラー」探しを通じた評価活動の検討—」広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要，第37号，301-306，2009.3
- 4) 村上かおり，鈴木明子，木下瑞穂，藤井志保，林原 慎，一色玲子：「中学校「技術・家庭」家庭分野における着装学習の指導方法に関する研究—衣生活の自己・他者分析を通じた評価活動の検討—」広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要，第38号，319-324，2010.3